

名古屋大学

NUA  
archives  
nagoya university

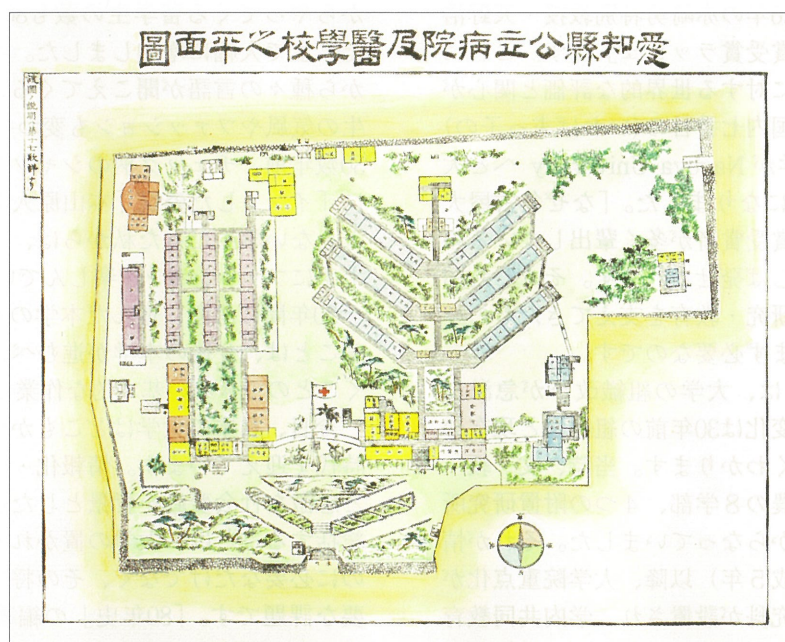
## 大学文書資料室ニュース

Nagoya University Archives News 第33号 2016. 3

目次

Contents

「名古屋大学80年史」の編纂にむけて (歴史資料・大学史編纂部門長 吉川卓治) —	2
国立公文書館「アーカイブズ研修 I」参加記 (大学文書資料室 田淵宗孝) —	3
約9,000点の法人文書史料を公開しています	4
加藤鏖五郎関係資料、石岡繁雄文書資料を公開しました	5
『紀要』第23号、第24号を刊行しました	6
ホームカミングデーで企画展をおこないました	7
皇學館大学研究開発推進センター館史編纂(皇學館大学 大平和典) —	8
資料室日誌(抄)	10
松尾清一総長が全学教育科目「名大の歴史をたどる」で講義	12



愛知県立病院及医学校之平面図  
(明治13年頃、名古屋大学附属図書館医学部分館所蔵)



# 「名古屋大学80年史」の編纂にむけて

大学文書資料室 歴史資料・大学史編纂部門長 吉川 卓治

3年後の平成31（2019）年に名古屋大学は、前身の名古屋帝国大学が誕生してから80周年という節目を迎えます。そこで大学文書資料室では近々「名古屋大学80年史」の編纂作業に着手し、平成33年（源流である仮病院・仮医学校の開設から数えて150周年になる）までに刊行しようと計画を立てているところです。

本学の沿革史としては、平成元（1989）年から7年にかけて刊行された『名古屋大学五十年史』（部局史2巻、通史2巻、写真集）があります。これは創立50周年記念事業の一環として、本学が総力をあげて取り組んだ一大プロジェクトでした。それから30年ほど経ったわけですが、今、再び年史編纂の作業を進めようとしているのはどうしてでしょうか。

それは、2039年にやってくる創立100周年に向けての「助走」というのが一つの理由です。沿革史の編纂には膨大な時間と労力が必要とされるからです。ですが、それともかかわってもう一つ大きな理由があります。それはこの30年間にそれまで想像もつかなかったくらいに名古屋大学がさまざまな面で急速に変貌を遂げてきたことです。以下、思いつくままに五点ほど記してみましよう。

第一は、平成13（2001）年の野依良治教授（当時）に始まり、20年の小林誠特別教授、益川敏英特別教授、下村脩特別教授、26年の赤崎勇特別教授・天野浩教授と続く「ノーベル賞受賞ラッシュ」です。これにより本学の研究・教育に対する世界的な評価と関心が格段に高まりました。国内七番目の（いわば末っ子の）「帝国大学」だった本学がNagoya Universityへと大きな存在感を示すようになりました。「なぜ名古屋大学関係者からノーベル賞受賞者が多く輩出しているのか？」との疑問がしばしば発せられます。そうした問いに答えるには本学の研究・教育を支えてきたものを整理・検証することがまず必要なのです。

第二にあげられるのは、大学の組織改革が急激に進んだことです。この変化は30年前の組織図と現在の組織図とを比べるとよくわかります。当時、文・教・法・経・医・理・工・農の8学部、4つの附置研究所と若干のセンターなどからなっていました。それが情報文化学部の新設（平成5年）以降、大学院重点化が進展し、大学院独立研究科が設置され、学内共同教育研究施設や学内コンソーシアムなどが大幅に増加しました。今では以前とは比べものにならないくらい複雑な組織となっており、名古屋大学の「自画像」を描く

のも容易なことではありません。

第三に平成15（2003）年に制定された「国立大学法人法」によってその翌年から国立大学法人名古屋大学となったことがあげられます。これにともなって理事などの役員が置かれ、経営協議会や教育研究評議会が設置されました。大学の管理・運営の方法も大きく変わることになりました。この新たな仕組みを動作させるためになされた試行錯誤の跡を整理しておくことが求められています。

第四に大学の景観も変化を遂げつつあります。校舎の耐震化が進み、キャンパスには大きな新しい建物が立ち並ぶようになりました。地下鉄の駅ができたのもこの間の出来事として特筆すべきことでしょう。

第五に学生の数や姿、文化が変わりました。学部生は1万人前後で大きな変動はありませんが、4000人ほどだった大学院生は今や6000人を越えています。海外からやってくる留学生の数も800人前後から2000人以上にまで大幅に増加しました。キャンパスのあちこちから種々の言語が聞こえてくるようになりました。学生の気風やファッションも変わったといえるでしょう。30数年前、チェック柄のシャツをよれよれのジーンズに「イン」した姿が「本山原人」と揶揄された世代の冴えない学生だった私からは、今の名大生ははるかに上手にファッションを楽しんでいるようにみえます。

30年間に急激に進んだ本学の変貌をトータルに捉えることは、今後の本学が進むべき方向を見通す上で欠くことのできない基本的な作業だといえるでしょう。

今日、日本の大学はどこもかつてないほどの激動の時代を迎えています。情報化・国際化・少子高齢化など急激な社会変動を背景とした近年の高等教育政策を総括することは、大学の置かれている現状を理解するのに必要なだけでなく、その将来像を描くためにも重要な課題です。「80年史」の編纂作業はそれにも貢献するものです。みなさまのご理解・ご協力を心よりお願い申し上げます。



## 資料室だより①

### ○国立公文書館「アーカイブズ研修Ⅰ」参加記

大学文書資料室 田淵 宗孝

平成27（2015）年8月31日から9月4日にかけて、国立公文書館主催の「アーカイブズ研修Ⅰ」が東京大手町にて開催されました。本研修は、公文書等の保存及び利用に関する基本的な事項を習得し、公文書館制度および公文書館法の趣旨に関する理解を深めることを目的としたもので、アーカイブズの仕事の基本を習得するための入門的位置づけの研修です。例年多くの参加者でにぎわう研修ですが、今回も全国の自治体や大学、外務省および防衛省等国家機関、そしてアーカイブズ学を学ぶ大学院生など、多様なアーカイブズに携わる受講生約70人が参加しました。

研修のポイントは以下のとおりです。

- アーカイブズ概要理解（海外事例理解含む）
- 公文書管理法の基礎理解
- 評価選別、目録作成等日常業務の理解
- デジタルアーカイブおよび電子公文書理解
- 事例報告
- 国立公文書館本館見学
- グループ討論



加藤館長の講義

本研修は基本理解の位置づけにありますので、参加者の多くは必ずしも現状理解に詳しいわけではありません。そうした中で、アーカイブズの意義について解説した加藤丈夫国立公文書館館長の講義は、ほかのすべての講義に関連する基本情報を的確に取り纏めたもので、大変貴重なものでした。そこでは、公文書館と博物館との違い、あるいは歴史資料館と図書館との違いなどといったアーカイブズの基本知識のみならず、外交交渉も資料のつき合わせから行われること、さらには歴史とは何か、あるいは公文書と教育の結びつきをめぐる陰と陽の関係など、哲学的ともいえる問題にも言及があり、参加者にとっては改めて身の引き締まる思いを感じる講義となりました。また、今後の課題として、デジタル化の推進が非常に大きな意義を有している点につき指摘がありました。

デジタルアーカイブの意義については私も個人的に関心を持っておりましたので、グループ討論でもデジタルアーカイブ班の司会を務めさせていただき、班員の方々の現状などを興味深く拝聴することができました。また、最終日の討論発表会では、名古屋大学大学文書資料室の電子資料検索および「ちょっと名大史」による歴史および資料のネット上での紹介といった取り組みにつき、簡単に紹介させていただきました。



本室の事例を紹介する筆者

## 資料室だより②

### ○約9,000点の法人文書史料を公開しています

平成23（2011）年4月1日に施行された「公文書等の管理に関する法律」（公文書管理法）は、歴史的に重要な公文書（歴史公文書）を、洩れなく公文書館に移管し、これらを国民に公開することを義務づけています。しかし同法はその一方で、歴史公文書を受け入れ、保存、公開することができる施設を厳しく制限し、内閣総理大臣による指定を受けることを求めています。現在、国立大学法人において、この指定を受けている大学アーカイブズはわずか9しかなく、大学文書資料室もその1つです。

大学文書資料室（以下、本室）は、すでに公文書管理法施行前から、本学の法人文書史料の移管を受ける施設とされ、学内規程にも明記されていました。ただ、移管を受けるための実務的な体制が整っていなかったことや、移管された法人文書を保存する書庫の問題もあって、移管が思うように進まず、本来なら本室に移管されるべき法人文書が事務組織の書庫に滞留している状況になっていました。

この状況が、公文書管理法の施行と、同時に本室が特定歴史公文書の取り扱い機関としての指定を受けたことにより、劇的に改善されました。事務組織の書庫に滞留していた法人文書史料が大量に移管されると同時に、年度末に保存期間が満了した法人文書が一定のシステムに従って移管される仕組みが整備されました。また、これまでは保存期間が満了しても、保存期間の延長を繰り返すことによって半永久的に事務組織が保存してきたきわめて重要な法人文書も、本室に移管されるようになりました。例えば、本部の評議会や部局長会、各部局の教授会の記録も、本来の保存期間である30年が経過すると、洩れなく移管することが慣例化しました。

現在、本室が一般公開している法人文書史料は約9,000点にのぼり、これからも逐次増えていきます。目録情報は、本室のホームページから閲覧できます。現在はエクセルファイルの状態ですが、平成28年4月1日から新しい検索システムで見られるようになる予定です。



特定歴史公文書等の専用書庫内の様子



昭和40年代の評議会議事録



## 資料室だより③

## ○加藤鏢五郎関係資料、石岡繁雄文書資料を公開しました

このたび大学文書資料室では、2群の個人資料を一般公開しました。

1つは加藤鏢五郎関係資料です。加藤鏢五郎（1883-1970）は、本学医学部の前身である愛知県立医学専門学校の卒業生で、のちに政治家を志しました。名古屋市議員、愛知県議員を務めた後、大正13（1924）年には名古屋市の選挙区から衆議院議員に当選しました。約30年にわたって衆議院議員を務め、戦後は法務大臣、国務大臣、衆議院議長を歴任しています。この約2,800点に及ぶ資料群は、本学の元総長である加藤延夫名誉教授と祥子夫人から寄託されたものですが、愛知県公文書館にも加藤御夫妻から日記等の重要資料が寄託され、これらも一般公開されています。同館と本室の公開資料を合わせて利用すれば、よりよい調査ができるものと思います。

もう1つは石岡繁雄文書資料です。この資料については、本ニュース第30号（平成25（2013）年3月）で本室に寄託された経緯を紹介しました。石岡繁雄（1918-2006）も名古屋帝国大学工学部の卒業生で、戦後は本学の職員として勤務、その後、豊田高専、鈴鹿高専の教授を歴任しました。井上靖の人気小説『氷壁』のモデルになったいわゆる「ナイロンザイル事件」の当事者として、企業やアカデミズム、山岳界の責任を問い、敢然と戦った人物です。この石岡の個人資料のうち、文書資料約1,600点が本室に寄託、物品資料が本学博物館へ寄贈されたことを記念して、平成25年11月から翌年1月を会期に、ナイロンザイル事件と石岡の人生をテーマとする企画展をおこない、これも本ニュース第31号で概要を紹介しました。その後、本室では石岡繁雄文書資料の公開用目録の作成作業を進め、このたびの公開となりました。

この両資料群の目録情報は、平成28年4月1日から運用を開始する予定の新検索システムでも検索することができます。公文書ではありませんが、本室が平成26年度に改組する前に受け入れた資料のため、公文書管理法に基づく特定歴史公文書等としての取り扱いになります。



衆議院議員に初当選した当時の加藤鏢五郎  
（『加藤鏢五郎伝』より）



ナイロンザイル事件に関する公開実験について報道関係者に説明する石岡繁雄（1973年）

## 資料室だより④

### ○『紀要』第23号、第24号を刊行しました

大学文書資料室（以下、本室）では、平成27（2015）年3月に『名古屋大学大学文書資料室紀要』第23号を、平成28年3月に同第24号を刊行しました。

第23号には、平成26年2月から6月にかけて附属図書館医学部分館の主催で、同年8月において同館と本室が共催で開催した企画展「戦争と大学」の展示記録と、平成26年11月26日に本室が開催したシンポジウム「今、なぜ大学史か」の記録を掲載しました。前者は、本室が初めて附属図書館医学部分館と共催した、マスコミにも大きく取り上げられて話題となった企画展です。開催まで経緯から、展示物1点1点の写真やキャプションに至るまで、オールカラーの詳細な記録です。後者は、本ニュース前号でも概要を紹介したシンポジウムについて、基調講演とコメント、討論の音声記録を全て活字化し、配布資料等とともに載せたものです。

第24号には、アーカイブズに関する論稿2本と、企画展の記録を掲載しました。堀田慎一郎室員による論文「国立大学法人における機関アーカイブズの構築とその諸問題（前編）」は、国立大学法人の機関アーカイブズの構築には、法人文書と大学資料（刊行物・印刷物資料）を合わせたトータルな視点が必要であることを提唱し、本学の事例を中心にその方法の現状と課題を論じたものです。田淵宗孝氏による報告「ノルウェーにおけるアーカイブズとその政策概要」は、日本ではほとんど知られていない北欧のアーカイブズ事情について、現地の資料に基づいて詳細に紹介したものです。高文軍氏（桜花学園大学教授）による展示記録「郁達夫八高入学百周年記念展示会」は、本学旧教養部の前身にあたる旧制第八高等学校の卒業生で、近代の中国を代表する作家である郁達夫を特集した企画展（平成27年9～10月、於名古屋大学中央図書館）の詳細な記録です。

両号に掲載されている内容は、本学附属図書館の「名古屋大学学術機関リポジトリ」で閲覧できます。

名古屋大学 大学文書資料室紀要	
第23号——2015年3月	
目次	
展示記録 企画展「戦争と大学」 ——一九三二～一九四五 官立名古屋医科大学（名古屋帝国大学）—— 蒲生英博・堀田慎一郎	1
シンポジウム「今、なぜ大学史か」の記録 今、なぜ大学史か——その意義と経緯—— 開会挨拶（趣旨説明） 基調講演 ——特色の論議、アチンティエの経歴、そして「学校教育」 ——特色の論議、アチンティエの経歴、そして「学校教育」—— 寺崎昌男	89
コメント 大学史編纂事業の意義と役割を考ふる 名古屋大学五十年史からの歴史 大学史資料を展示する ——大学史の未来から—— 西山 伸 福岡 猛志	113 115 117 121
討論 編集要項・投稿要領	
名古屋大学大学文書資料室	



## 資料室だより⑤

## ○ホームカミングデイで企画展をおこないました

大学文書資料室は、平成27(2015)年10月17日(土)に開催された第11回名古屋大学ホームカミングデイにおいて、企画展「地図・図面で見える名大キャンパスの歴史」をおこないました。場所は、ホームカミングデイメイン会場である豊田講堂の2階ギャラリーです。

この企画展は、本学及びその前身学校のキャンパス、あるいはその将来構想について描かれてきた地図や図面を展示したものです。本学の創基にあたる名古屋県仮病院・仮医学校が設置された1871(明治4)年から、1939(昭和14)の名古屋帝国大学の創立を経て現在まで、140年以上に及ぶ時代の史料を広く調査し、その中から20枚を厳選、これらをパネルに拡大して展示しました。地図・図面の選定にあたっては、歴史的に重要なことはもちろんですが、眺めるだけでも楽しめるようなものを、できるだけ全時代から万遍なく、しかもさまざまな種類のものを配置するように心がけました。本ニュース表紙と本頁の図は、この企画展でパネル化したものです。

本室の所蔵資料は紙の文書が中心であり、こういった企画展で展示すると、どうしても単調な印象になりがちです。その意味で、こういった図面類は、一目で人々を名大の歴史に引きつける力を持った貴重な資料だと思います。本学の沿革史の常設展を設置する際にも、図面類を上手く活用することが重要になるでしょう。

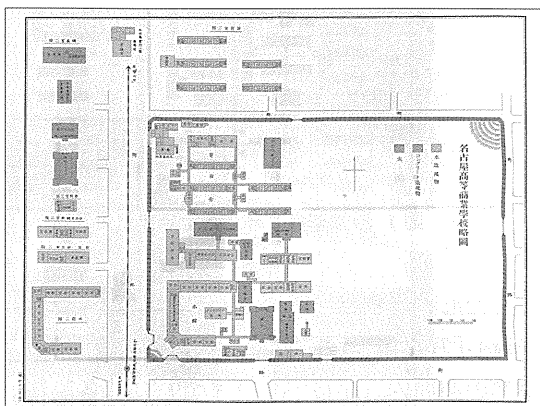
今回は、展示場所が前年までの1階ホワイエからやや目立たない所に変更されたため、少し心配していましたが、実際には400名近くの観覧者があり、しかも例年よりじっくりと観ていただけたように感じました。



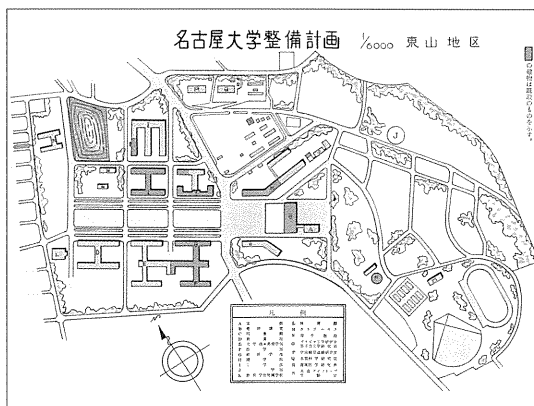
企画展の様子①



企画展の様子②



名古屋高等商業学校略図(昭和11(1936)年)



名古屋大学整備計画(昭和35(1960)年)

## 東海地区の大学アーカイブズ④

## 皇學館大学研究開発推進センター館史編纂

皇學館大学研究開発推進センター 准教授 大平 和典

## はじめに

皇學館大学は、三重県伊勢市に所在し、創立は明治15（1882）年です。戦前の神宮皇學館は内務省所管の官立専門学校、昭和15（1940）年に文部省に移管されて神宮皇學館大学となりますが、昭和21年に廃学。昭和37年に私立大学として再興されました。現在、文学部・教育学部・現代日本社会学部の3学部および大学院・神道学専攻科よりなり、約3,000人の学生が学んでいます。

その本学の学園史担当部署が、「研究開発推進センター館史編纂」です。前身は法人本部に設置されていた「館史編纂室」で、平成26（2014）年度より、大学附置機関である研究開発推進センターに統合されました。以下、館史編纂室の活動と、年史編纂事業の終了にともなう改組・統合について、ご紹介します。

## 法人本部館史編纂室の概要

館史編纂室は、平成24年に皇學館大学創立130周年・再興50周年を迎えるにあたり、創立以来の皇學館の歴史を編纂刊行する目的で平成15年4月に法人本部に皇學館史編纂委員会が発足、その必要業務を行うため、法人直轄の組織として設置されました。

本学園ではこれまでに、『神宮皇學館五十年史』（昭和7年）・『神宮皇學館創立六十周年記念誌』（昭和17年）・『創立九十年・再興十年 皇學館大學史』（昭和47年）・『皇學館大學百年小史』（昭和57年）・『皇學館高校三十周年記念誌』（平成5年）・『皇學館中学校二十年記念誌』（平成10年）・『皇學館百二十年周年記念誌』（平成14年）といった史誌が編まれています。今回はこれらをふまえつつ、さらに書き継ぎ、より詳細かつ広範な大学史・学園史を編むことが期待されました。組織としても、100周年に際しては、附置研究所である史料編纂所内に大学史編纂室、また120周年の際には法人本部に記念誌編纂室が設置されましたが、いずれも常設ではなく、また専任室員も置かれていません。その点、平成16年4月から館史編纂室に専任1名が配置されたことは極めて画期的なことでした。

館史編纂室では開設以来、その設置目的である『皇學館大學百三十年史』編纂刊行のための関係資料の収集・整理・調査研究を進めてきました。

平成17年度からは中間報告の意味で年1回、資料展を開催しています（周年記念式典の前年平成23年まで全7回、および記念式典当日）。展示解説を兼ねた資料集も刊行し、これが『皇學館大學百三十年史』資料篇の基礎となっています。

あるいは、我が国における大学史・学校史の編纂刊行の実態、内容と水準を知るため、他校の年史・記念誌の蒐集にもつとめ、それらは大学附属図書館に配架し利用に供しています。

自校史教育に関しては、その一環を意図して学園報に「皇學館の来歴」という連載を開始、また全学部の1年生を対象とする必修科目「伊勢学」のうちの1コマとして「皇學館の歴史」が開講されています（平成21年度～27年度）。

『皇學館大學百三十年史』は、平成24年4月の創立130周年・再興50周年記念式典にあわせて第1冊目となる「総説篇」を刊行。続いて同年度末には「資料篇一」、翌25年度末には「資料篇二」「資料篇三」を刊行しました。

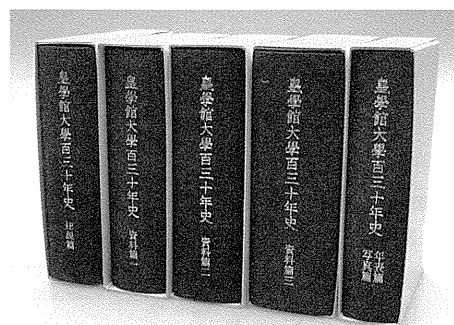


図1 『皇學館大學百三十年史』全5冊

ただし、当初は「総説篇」「各説篇」「資料篇」「年表篇」「写真篇」の5部構成を計画しましたが、周年事業の期間内（平成25年度まで）に「各説篇」「年表篇」「写真篇」は刊行に至らず、「各説篇」は刊行を断



念。編纂途上にあった「年表篇」「写真篇」については26年度中の刊行を目指すことになりました。(なお、「各説篇」のうち提出済み原稿は、『皇學館大学研究開発推進センター紀要』に順次掲載しています。)

館史編纂室も平成25年度末をもって廃止となり、26年4月より皇學館史関係資料は研究開発推進センターの所管となりました。研究開発推進センターは、その前年度、平成25年4月に発足、神道研究所・史料編纂所・佐川記念神道博物館という3機関を一元的に運営するとともに、新たな研究プロジェクトを推進することを目的として設置された組織です。

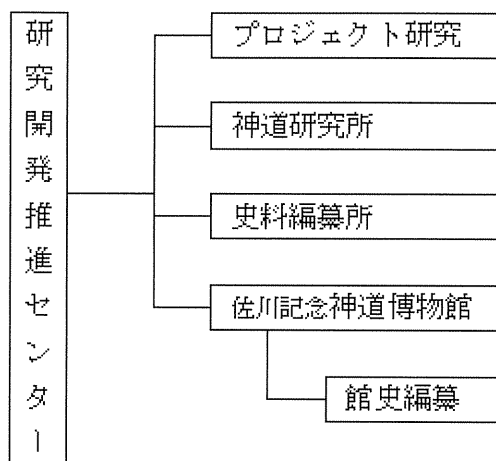


図2 研究開発推進センター組織図

### 年史編纂事業の終了と現在

館史編纂室の廃止にともない、関係資料は同センターの所管となりましたが、法人本部館史編纂委員会が存続して引き続き「年表篇・写真篇」刊行の準備を進め、平成26年12月に刊行し全5冊完結(図1)。これをもって創立130周年・再興50周年記念事業としての皇學館史編纂事業は終了しました。センター内の「館史編纂」業務も佐川記念神道博物館内に位置付けられ(図2)、27年度より館史編纂室の専任1名(筆者)は佐川記念神道博物館学芸員・准教授に異動し館史関係業務を兼任する形がとられ現在に至っています。

「館史編纂」という組織名からも、その目的は次の年史編纂事業にむけた資料収集・整理・保存・調査研究にあることが窺えますが、年史編纂事業終了とともに組織が完全に廃止されなかったことは、建学の精神・学園の歴史についてとりわけ重要視している本学において必置の機関であるとの学内理解と、次の年史編纂事業において改めて資料所在確認を一から行わなければならない効率の悪さを避けるという点が最も大

きな要因としてあると思われますが、ともあれ、大きな一歩だと確信します。組織として存続していることにより、館史関係資料について引き続き学内からの提供もあり、またレファレンス対応といった業務を行っています。

一方で、課題も多く残されています。第一は、スペースの問題で関係資料を分散せざるをえなかったことです。専用の施設がなく、博物館の収蔵庫にもスペースに限りがあり、保存箱に入れるなどして各所に分散し保管しているという現状です。

活動に関しても、資料調査とレファレンス対応に限られ、大学アーカイブズとしての機能を有しているという段階にはありません。非現用文書の移管をシステム化するためにも、まずスペースや人員の問題が立ちはだかります。資料公開については申し出により閲覧を許可していますが、公開基準は設けずその都度対応しており、また資料目録もあくまで部内用に作成したもので網羅的でなく、且つ公開を前提として作成していません。

展示活動に関しては、学内の皇學館大学記念館という建物内に設けられた展示室があり、そちらに皇學館史関係の資料を展示していますが(図3)、限られたスペース(32.2㎡)で、また認知度も低い状態です。今後、企画展の開催なども課題であると考えています。



図3 皇學館大学記念館 展示室

### おわりに

以上、年史編纂を終え、現在は大学アーカイブズへ移行することが可能かどうか、可能であればどのような方針が望ましいのか、方向性を模索している段階にあるといえます。他校の事例に学び、今後の活動を展開していくことができればと思います。

## 資料室日誌 (抄) 平成27(2015)年2月～28(2016)年1月

- 2月1日 堀田慎一郎室員が、一宮市尾西歴史民俗資料館の歴史講座で、「歴史資料としての公文書を考える—公文書を後世に残すとはどういうことか—」と題して講演。
- 2月2日 行政管理研究センターによる公文書管理のあり方に関する調査に、笹部真理子研究員と若月剛史成蹊大学助教が来室(堀田室員、佐分さとみ室員、井田幹恵掛長)。
- 2月10日 業者(燻蒸車)による資料燻蒸(～2/17)。
- 2月13日 堀川直顕名誉教授から資料を受贈。
- 2月20日 本室室会議を開催(構成メンバー: 鮎京正訓室長、池内敏部門長、堀内敦部門長、堀田室員、佐分室員、井田掛長、柳内佑介事務職員)(3/24にも開催)。
- 2月23日 学習院大学大学院生久保田明子氏が博物館企画展等のため宇宙線研究室資料を調査(～2/25、以後、3/5～6、3/30～4/1、5/14～15、5/21も)。
- 3月2日 佐分室員と伊藤由美事務補佐員が財務会計システム操作講習会に出席。  
本学の年度末退職予定者に「資料及び刊行物等の寄贈について(依頼)」を通知(3/12には役員等へも通知)。
- 3月9日 池田部門長と堀田室員が、立教学院展示館、明治大学博物館大学史展示室を視察。
- 3月12日 松尾清一副総長(次期総長)と総長講義及び沿革史展示施設について面談(鮎京室長、池内部門長、堀田室員、井田掛長)。
- 3月17日 東京外国語大学文書館の倉方慶明氏が本室を視察。
- 3月18日 本室事務補佐員就職希望者を面接(池内部門長、大矢淳一総務課長、堀田室員)。  
堀田室員がホームカミングデイ実行委員会に出席(以後、5/27、9/16、11/11も出席)。
- 3月19日 樋口敬二名誉教授から資料を受贈。
- 3月26日 河合成典農学部・生命農学研究科図書掛長へ業務引き継ぎ(増田よしみ事務補佐員)。
- 3月31日 『名古屋大学大学文書資料室紀要』第23号、『名古屋大学大学文書資料室ニュース』第32号を刊行。  
鮎京室長、池内部門長が退任。
- 増田事務補佐員、小正展也事務補佐員が退職。
- 4月1日 竹下典行理事・事務局長が室長に就任。  
吉川卓治教授が歴史資料・大学史編纂部門長に就任。  
河合事務補佐員、木村美幸事務補佐員が着任。
- 4月2日 堀田室員が新規採用職員研修で名古屋大学の歴史について講義。
- 4月6日 小林邦彦名誉教授から資料を寄贈。
- 4月8日 新任教員研修でポスター及び刊行物を展示。
- 4月14日 平成27年度全学教育科目(全学教養科目)「名大の歴史をたどる」を開講(前期)。
- 4月15日 本室室会議を開催(構成メンバー=竹下室長、吉川部門長、堀内部門長、堀田室員、佐分室員、井田係長、柳内事務職員)(以後、5/20、6/17、7/15、9/11、10/21、11/18、12/16、1/27に開催)。
- 5月1日 金城学院総務部学院資料室の鈴木卓美氏が本室を視察。  
東京大学文書館の小根山美鈴氏が本室を視察。
- 5月13日 鍋島俊隆名誉教授から資料を受贈。  
石岡あづみ氏と石岡繁雄文書資料の取り扱いについて打ち合わせ(堀田室員)。
- 5月14日 伊藤正祐名誉教授から資料を受贈。
- 5月21日 博物館に宇宙線研究室資料を貸し出し(企画展のため、9/28返却)。
- 5月22日 松尾総長と総長講義について打ち合わせ(堀田室員、井田係長)。  
河合事務補佐員が、国立公文書館の「公文書管理研修Ⅰ」(東京)を受講。
- 5月26日 博物館企画展「関戸弥太郎と宇宙線望遠鏡」に協力(～9/26)。
- 6月1日 田渕宗孝事務補佐員が着任。
- 6月8日 堀田室員と佐分室員が「国際アーカイブズの日」記念講演会を聴講、堀田室員が全国公文書館長会議関連行事で国立公文書館を視察。
- 6月9日 吉川部門長、堀田室員、佐分室員が全国公文書館長会議及び関連行事に出席。
- 6月15日 堀田室員が総務部総務課及び同広報渉外課と、行幸啓における大学説明会パネルの製



- 作について打ち合わせ。
- 6月16日 全学教育科目「名大の歴史をたどる」で松尾総長が講義。
- 6月17日 田淵事務補佐員が国立公文書館の「公文書管理研修 I」を受講。
- 6月24日 山内一信名誉教授から資料を受贈。
- 6月29日 石岡あづみ氏に企画展のため石岡繁雄文書資料を貸し出し（8/19にも貸し出し、12/4返却）。  
舟橋重信名誉教授から資料を受贈。
- 7月15日 教育推進部学生支援課より法人文書移管。「平成26年度に作成された印刷物の提供について」を全学に依頼。
- 7月26日 天皇・皇后両陛下の行幸啓（堀田室員が奉送に参加）。
- 8月3日 八高会より資料を受贈（8/7にも受贈）。
- 8月6日 小木曾靖子氏より資料を受贈。
- 8月10日 読売新聞朝刊に、本室が調査中の汪兆銘関係資料に関する記事が掲載。  
学内・学外に紀要第24号への投稿を募集。
- 8月13～14日 全学一斉夏休み休暇にともない閉室。
- 8月24日 東京大学文書館の加藤諭特任助教が本室を視察。
- 8月27日 文系事務部より法人文書移管。
- 8月31日 田淵事務補佐員が国立公文書館の「アーカイブズ研修 I」受講（～9/4）。
- 9月2日 総務部職員課より法人文書移管。
- 9月11日 黎明会（岡崎高等師範学校同窓会）から資料を受贈。
- 9月15日 附属図書館情報システム課より法人文書移管。
- 9月24日 堀田室員が、事務企画連絡協議会で法人文書の移管と印刷物の提供について説明。
- 9月28日 室敬之氏から資料を受贈。
- 9月29日 医学部・医学系研究科総務課より法人文書移管。
- 9月30日 情報文化学部・情報科学研究科（図書掛のみ）、理学部・理学研究科・多元数理科学研究科より法人文書移管。
- 10月5日 全学教育科目「アーカイブズ学入門一文書史料の世界をあるく」を開講。
- 10月17日 ホームカミングデイにて企画展「地図・図面で見る名大キャンパスの歴史」を開催。
- 10月20日 80年史ワーキンググループを開催（吉川部門長、羽賀祥二教授、伊藤彰浩教授、堀田室員）（以後、11/24、1/12にも開催）。工学部・工学研究科総務課より法人文書移管。
- 10月21日 吉川部門長、堀田室員が、大路樹生博物館長、吉田英一教授と博物館改修後の展示について相談。  
附属図書館情報管理課より法人文書移管。
- 10月30日 教育推進部基盤運営課、同入試課より法人文書移管。  
環境学研究科より法人文書移管。
- 11月19日 教育学部附属学校より法人文書移管。  
佐分室員が財務会計システム・パネル説明会に出席。
- 11月26日 双光エシックスと新検索システムの導入について相談。
- 11月27日 企画部企画課より法人文書移管。
- 11月30日 青木久仁子事務補佐員が退職。
- 12月3日 堀田室員が自然科学系アーカイブズ講演会・研究会（核融合科学研究所）にパネリスト等として出席（～12/4）。
- 12月8日 研究協力部研究支援課より法人文書移管。
- 12月22日 情報文化学部・情報科学研究科より法人文書移管。
- 12月24日 堀田室員が法人文書ファイル管理簿の更新説明会で法人文書の移管について説明。  
堀田室員と佐分室員が文書管理担当者研修会に参加。  
医学部・医学系研究科経営企画課より法人文書移管。
- 1月6日 北海道大学大学文書館の山本美穂子技術専門職員が本室を視察。
- 1月13日 双光エシックスと新検索システムについて打ち合わせ。
- 1月14日 総務部総務課より、本室利用等規程の改正案を内閣府へ提出。
- 1月22日 東京学芸大学から木村優教育研究支援部長と小峯康夫大学史資料室事務室長が本室を視察。
- 1月27日 総務部総務課より法人文書移管。

## ○松尾清一総長が

# 全学教育科目「名大の歴史をたどる」で講義

平成27（2015）年6月16日（火）、全学教育科目「名大の歴史をたどる」において、松尾清一総長が講義をおこないました。

毎年開講しているこの「名大の歴史をたどる」は、大学文書資料室の吉川卓治教授による、全学部の1年生前期を対象とするもので、約200名の学生が受講します。現在までの名大の歴史を一通り解説したうえで、時の名大総長をゲスト講師として、これからの名大などについて語っていただいています。平成27年4月に就任し、今年が初めての講義となった松尾総長は、「名古屋大学の過去、現在、未来—人類の幸福と社会貢献への挑戦—」と題し、約80分間にわたって学生たちに語りました。

松尾総長は、現代の日本が、社会の高齢化をはじめとする、課題に満ちた「課題先進国」であることから説き起こし、これらの課題を解決するため、名大で何を学ぶべきか、と学生たち問いかけました。そして名大は、10年後、20年後の将来ビジョンとして、社会参加寿命が平均寿命に近くなり、多様性が尊重されつつ高齢化しても生き生きと暮らせる、しかもその発展が持続できる社会を想定し、このビジョンを実現するために「日本屈指の大学から世界屈指の大学へ」をスローガンとして、トップグローバル大学をめざすと述べました。さらにその具体的な取り組みを、海外や東日本大震災における総長自身の経験を織り交ぜながら解説していきました。そして最後に、自身のモットーである「安定は動の中に在り」という言葉で講義を締めくくりました。

この講義の様態を撮影した動画を、インターネット（「名大の授業」<http://ocw.nagoya-u.jp/>）で視聴することができます。



講義をする松尾総長



講義室の様子

## 名古屋大学大学文書資料室ニュース 第33号 Nagoya University Archives News No. 33

名古屋大学大学文書資料室  
室長 竹下 典行（理事・事務局長）  
部門長 吉川 卓治  
（歴史資料・大学史編纂部門、  
教育発達科学研究科教授）  
部門長 堀内 敦  
（歴史公文書部門、総務部長）  
室員 堀田 慎一郎（特任助教・専任）  
室員 佐分 さとみ（契約職員・専任）  
係長 井田 幹 恵  
（総務部総務課文書法規係）  
事務職員 柳 内 佑 介（同上）  
事務員 河 合 成 典（大学文書資料室）  
伊 藤 由 美（大学文書資料室）

発行日 2016年3月31日  
編集発行 名古屋大学大学文書資料室  
名古屋市中区不老町丁464-8601  
電話：(052) 789-2046  
FAX：(052) 788-6222  
E-mail: [nua\\_office@cc.nagoya-u.ac.jp](mailto:nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)  
印刷 株式会社荒川印刷  
名古屋市中区千代田2-16-38